いしかり潛

石狩町の石碑調査について……会長　山口福司　1
石狩町空襲について－調査メモ……青木　隆　3
石狩町の石碑－調査メモ……金子仲久　6
子供の頃に……阿部徹雄　12
ふるさと探求……村井喜久司　15
昔を偲んで……福田佐市　16
著述に対しての私的メモ……長谷川　嗣　17
花畔古老昔語り
　―藤井リエさんの巻―……吉本愛子　20
開拓と漢方草木……沖本義久　26

特別寄稿
　前川道寛著「石狩俳壇誌」誇るべき文化遺産の発掘……大森亮三　27

昭和60年度事業から……事務局　29
昭和60年度会員名簿

第6号

石狩町郷土研究会

1986，3月

石狩町の石碑調査について

会長　山口　福司

今年春の総会に於いて、「会として皆で纏まった仕事をやってみようではないか」。との声が出た。それでは　三〇〇年の歴史をもつ我が町の石碑を調査してみてはどうか、と決った。聞けばかつてこのような調査が行われてなかったとのことである。こう云う仕事こそ郷土研究会の行う事業ではなかろうか。

町民憲章の前章に、「わたくしたちは　北海道の母なる川、石狩川と青く豊かな日本海にはぐくまれた、歴史と伝統のまち石狩の町民です。このまちの町民であることに誇りをもち力を合せて住みよいまちを作りましょう」。と、また石狩町誌上巻の発刊（昭和四十七年）のことばの中に当時の鈴木町長が、「その豊かなる大河、石狩川の最下流の両岸に発達し、遠く慶長の古きにはじまり、三〇〇有余年の長い歴史と伝統を有する石狩町の歴史は、また道央の一頁とも云い得る重要さを有すると思うのであります」、と記されている。

なるほど北海道の歴史を繙くとき、石狩町を抜きにすることはできない、むしろ道央の基点として位置づけられる存在であることは言を俟たない。

かつて、松浦武四郎などもここを拠点として幾度か訪れていると云う。また安政年間には　箱館奉行の村垣淡路守範正、堀織部正利熙をはじめ、島義勇（後の初代開拓判官）、玉虫左大夫、郷昌作、大塚与七郎等多くの文人、武人が訪れていたと古文書などに記録が残されている。

近隣市町村で発行されている多くの史料に必ずと云っていいくらい石狩町が出てくる。その古文書も残念ながら役場庁舎の戦災などもあって石狩町には殆ど残されず、北海道大学北方資料室、北海道文書館、北海道開拓記念館、函館市立博物館その他に保存されていると云う。

そこで会としては、せめて町内に形あるものとして残されているものを、隅から隅まで隈なく堀り起してみようと云うことになった。

考えてみると変ぼうする社会環境の中で、今こそ時宜を得た事業であろうと思う。焦らず地道に、二年がかりを目途にスタートした。幸いなことに田中実会員が既に地図上に石碑の所在を事細かに注記されていたので、方針も立て易く容易に取りかかることができた。方法としては、会員の居住地を中心として、本町、花畔、生振、高岡、樽川、花川毎にお願いした。先ず写真を撮り、碑文を写し、計測、スケッチ等が基本的な調査であり、二次的にはその碑の由来、行事等であった。時季的には、晩秋の草木が枯れ見透しが良く日差しの軟らかい日を選んで作業を行った。幸い取材も順調に進み、調査した碑の数一〇〇基余、筆者の撮影した写真も三〇〇余枚に上り十月三十日の例会には八分通りのものを報告することができた。それにつけても金子仲久会員には七十二才の高令にもかかわらず、碑

文の写し、スケッチなど終始精力的に活動され、その姿は、只ら先駆者に対する真摯な祈りにも似たものを感じた。まことに恐縮のほかない。

なお、同時に由緒ある江戸時代末期や明治期の古人の墓碑も調査の対象とした、これについてはこの道の田中実会員のアドバイスがなくては出来ないことであった。また、次いでに十四の神社と十二の寺院についても取材すると共に、廃校となった学校跡の若干についても取材を行った。

調査してみて、最も古いものは安永三年（二一一年前）卯午正月吉日に千秋丸水主中として奉納された金龍寺境内にある手水鉢であり、新しいものでは、今年十一月二十四日に除幕された、樽川村開村記念碑であった。総じて江戸時代末期のもの若干、明治後半、大正、昭和前期のものと、農漁業の町から都市化の方向に大きく転換した昭和四十年代後半のものが多かった。

終ってみて、物言わぬ石碑が、老いた樹木が、そして姿なき先人が、私たちに語りかけてくるような錯覚にとらわれることしばしばであった。その時代、時代に報われることも少なく精一杯生きたであろうことが伺えて、現在の平和と発展の陰に多くの先人たちの労苦があったればこそと、敬虔な祈りを感ぜずにはいられなかった。

いま　四万町民の共有の財産である三〇〇余年の歴史にいささかでも光をあてることができて、私たちの調査なり研究が町民のみなさんに還元できることを喜びとしている。

このあと来春町教委において、町内の河口渡船場跡等数ある旧蹟に案内板を建てられるとのことで、これも取材の対象としたいと考えている。そして数度に及ぶ編集会議を重ね親しみ易く、多くの町民に喜んで載けるものを作りたいものと念願している。秋頃までには刊行して、インクの香りのする本を手にみんなで喜びを分ち合いたいものである

ご協力をいただいた関係者の皆さんに、厚くお礼を申し上げます。

六〇・一二・一四　義士祭の日

石狩町空襲について
―調査メモ―

青木　隆

一、終戦まぎわの戦局と北海道空襲

昭和二十年の八月十五日は太平洋戦争が敗戦による終結を見た日であり、日本人にとって、かって経験したことのない大きな転換の日でありました。

それに至るまでの戦局は日ごとに悪化をつづけ決戦場は本土にせまる感で全国の主要な都市をはじめ地方の都市にも連日すさまじい空襲がおこなわれ米軍は軍事施設はもとより一般民家にも無差別の猛爆撃をつづけ、まさに日本全土を焼きつくさんばかりであったのです。

北海道への本格的な空襲は昭和二十年の七月十四日と十五日の二日間にわたり、沖合いに接近してきたアメリカ機動艦隊機動部隊の航空母艦から飛び立ったグラマン戦斗機などによって函館、室蘭、釧路、根室、小樽、旭川そのほか多くの市町村を襲撃し全道的にはたいへん大きな被害をうけ、たくさんの死傷者が出たのでありましたが、この悲惨な史実は当時の報道管制などで公表されておらず、その後においても、とりまとめ発表されたものがないのです。

そのため罹災した各地で自分たちのまちが空襲をうけた実態を解明しようとする声が近年おこり、なかば風化しかけたともいえる空襲当時のようすをあきらかにするための動きが、とみにたかまっております。

二、石狩町の空襲

石狩が空襲されたのは、このときの二日目に当る七月十五日で終戦になった、ちょうど一ケ月前にあたる日だったのです。

そのときのようすは、いまの殆んどの町民が知らず、なかには石狩が空襲されたことを全く知らないかたもおります。

これは戦後四十年も過ぎて、戦争を知らない世代の国民が過半数を占めるいまでは、やむをえないことですし、さらにまた被災当時は人口八千人余の石狩町でしたが、その後四十年の間に亡くなられたり、転出されたかたもずい分おります。そうした中で近年町は大きな変ぼうによって四万人以上の人口になり、それだけ新町民がふえたことからむかしの石狩空襲が一般的に知られてないのも無理のないことです。

それで私たち郷土研究会においては、さきごろの例会のときに山口会長より、石狩町の歴史に特筆される空襲の事実記録が少く、このまゝでは少しずつ埋れてしまうおそれがあるので、この際四十年前にさかのぼって堀りおこし調査する必要があるのではないだろうかという提言があり協議の結果、いまも空襲当時の体験をされた人が、おもに本町や八幡町地域などに割合多く住んでいるので早速会員が訪問をして聞きとりなどにより、できるだけの調査記録に当り参考品なども収集につとめようときまりました。

さいわい石狩空襲の唯一の公式記録として当時石狩町役場で作製した『昭和二十年七月十五日、戦災記録簿』が『罹災者名簿』と『罹災証明書交付簿』を附して残されており現在この文書が石狩消防署に保管されております。

この文書から空襲時のようすをひろってみますと、おおむねつぎのようです。

当日は午前中から敵機が数十機編隊で石狩湾上空を飛行してたが、午後一時頃から小樽、札幌方面より飛んできたものと留萌方面から浜益・厚田両村を経てきた別の編隊とが海上で集結して、午後三時頃から石狩本町と石狩川をはさんだ八幡町の両市街に対して約三十機のグラマン戦斗機が上空を旋回し、反復銃爆撃をおこない二五〇瓩爆弾三十数発とそのほかに小型の爆弾も含まれ、油脂焼夷弾も相当数を投下し、あわせて機銃掃射を猛烈に行った。

爆撃によって八幡町に一ケ所、本町側では三ケ所から焼夷弾による火災が発生し、そのために八幡町で五戸が、また本町においては三十一戸の家屋が焼失をし、午後八時過ぎにようやく鎮火させたと書かれてます。

襲撃が止んだのは三時半頃とあるので最初の攻撃からは三十分位の間、猛攻をうけたらしく、この間に焼失した三十六戸のほか爆弾による倒壊家屋が十戸、大破は二十八戸、中小破は一五〇戸であわせて被災総戸数が二二四戸で罹災者は九百人にたっし、焼けた主なものが石狩町役場、警察の部長派出所、農業会指導部、青少年第二健民修練所があり、大破したのは石狩郵便局、配電々業所、青少年第一健民修練所、曹源寺などがあげられ相当な大被害をうけてます。

つぎに人畜の被害として、死亡者が十三人（男八・女五）重傷者は六人、軽傷者が七人となっており、家畜は牛二頭、馬二頭が銃撃をうけて死亡しているのです。

救助救護の方法は、家を失った人には漁業者の倉庫を開放したり、一般民家（知人等）に収容されているとなってます。

主食は大破以上の七十四世帯に対して三日分を給与し、乳幼児のミルクは二十九戸に五日分給与、そのほか焚出しを罹災者百人に対して二日間、非常勤務者五四〇人に二日間、全四十六人に対して五日間給与をした。

被服・寝具その他生活必需品は、罹災しない町内各家庭や町内各部落ならびに団体などから供出をうけ貸給与し、さらに隣接市町村からも応援をえて諸物資の供出を仰ぎ一時充足をした。

重軽傷者は石狩病院に収容して応急処置をしたあと重傷者（十三人）は自動車で札幌市立病院及び保全病院に収容をし加療した（その内六人が死亡し他は加療中）と書いてあり以上で空襲の状況は終りとなっております。

三、聞きとり調査を実施して

さきに記載した石狩町役場の『戦災記録簿』では空襲の状況と被害の表面的な記載に終っており、これはきっと当時としては死傷者や被害程度などが秘密扱いになっており、報道管制もきびしかった

と思いますし、また敗戦直後に各方面で戦時関係資料が相当多く処分されたのに石狩の空襲記録が残っていたことは、さいわいに思わなければならないと存じます。私たちが、これからすすめてゆく体験者個々からの聞きとり調査では、できるだけ当時を思いうかべてもらいながら空襲下にあって町の人たちが家庭や職場などで、どのようなおもいで、どのように斗ったのかを具体的に語ってもらうように心がけて調査をすることになりました。

今までに十人のかたに好意的なご協力をいただくことができ、お話を聞かせてもらいました。どなたもみな語りながら次第に、はげしかった空襲の〝あのとき〟にたちかえったように真験に話していただくことができ本当にありがたく感じました。

空襲時には敵機をむかえ撃つ日本の飛行機は一機も現れず、軍の対空砲火などもないので無抵抗の町民が米軍機のおもうがまゝ赤子が痛めつけられるように一方的な、ものすごい攻撃にさらされ、なかにはわが家を業火からふせごうと防空ごうから出て悲惨な死をとげられたり、負傷された人もおります。
または家族の安否を気づかいながらも近所の消火や避難をたすけたり、爆弾で重傷を負った人のお話も伺いました。

みんなが石狩のまちを守るために必死のおもいで斗った、たいへんすばらしい努力のようすを聞かせてもらい感激と驚きの連続で、この調査をぜひとも仕上げたいという意欲がたかまりました。もっと大ぜいの体験を聞こうと考えております。

内容的に大分多くなるので、こんご整理をした上で郷土研究会の予算を勘案しながら昭和六十一年に、『石狩空襲を語り伝える』（仮称）の小冊子を発刊し多くの町民のかたに読んでいただきたいものと会員仲間で話合い中です。

いまは、まったく平和そのものの毎日を過してますが、若い世代のかたたちに戦争中のむかし話かとうけとめられないで戦争の恐ろしさや犠牲の大きさ、そして愚かさを知っていただくと共に石狩町にも空襲という歴史があった事実を体験談から忍んでいただき、そして眼にみえないところにも先人たちのたいへんな苦労と努力があるから、こんにちのしあわせがあり、さらに次の繁栄につながることを、ご認識ねがいたいものと念じながら私たちの調査をすすめております。

石狩町の石碑
―調査メモ―

金子　仲久

七月の郷土研究会例会に於て、テーマの一つに石狩町の石碑調査の事が取上げられた。石狩町開基三百余年、開町一二〇年を数年後に迎へようとする石狩に各種の記念碑、地神塔、馬頭観音、文学碑、又史実に名を遺した人の墓碑等一体どの位の数があるのであろうか、之等の事を頭に於て石碑を尋ね歩いて見る事にした。

かねて山口会長は三百余年の歴史ある石狩町に、比の様な調査が未だなされていないのは残念だと洩らしてゐたが郷土研究会でも之に取組む事が決まり二年掛りの予定で手がける事になった。

さてどの様な方法ではじめ様かと途まどったが比較的神社等に石碑が多いのを思い、先づ花畔神社に足を向けた。昭和五十八年に花畔神社々誌を手がけた事もあったので、此の神社境内の石碑を調べる事にした。

此の仕事に取組むに當って、記念碑、馬頭観音、地神塔等の範囲を対象とする予定であったが、燈籠や鳥居、狛犬、手水鉢等を見て皆それぞれに先人の名前や年月日が刻まれており、此の機会を利用して対象外の物もすべて拾ひ上げて見る事にした。

此の調査に當って案外、今迄気にとめてゐなかった故か同じ石狩町内であり乍ら生振とか高岡等他の方面へ行くと何処にどの様な碑があるのか判らない。それで会員の田中実さんがこの碑の所在を刻明に地図上に記してある事を聞き、失礼を顧りみず御邪魔して御教示を乞ひ、又或時は忙しい中を御同行願って道案内をして頂き隈なく取材する事が出来、又山口会長が忙しい体にも係らず勤務外の休みの日を利用して精力的に写真を撮って頂き、生振では長谷川さん、前川さんが忙しい中をわざわざ案内して下さり御協力下さった事は非常に有難く、又五の沢で取材中、初めてお会いする方から私共の目的を聞かれ、之又親切に御案内して下さった事等皆様の温かい御協力に涙の出る程嬉しく、お陰で雪の降る間際迄に九分通りの調査を終へる事が出来た。

長い歳月風雨に曝されて石碑も瘠せ細り、文字も定かに判読出来ないものや、木陰で苔むした碑の文字を書き写しながら、之等の碑に刻まれた人々が命をすり減して開拓に励んだであろうその事を思うと書き写す文字も霞んで来て筆をとめる事もしばしばであった。

之等の石碑の取捨分類方法は後で会員の方々と意見の交換をしながら決める事になるであらう。それで大雑把に方面別に拾い上げて行く事とし、先にも記した如く全く関係ないと思われるのもあるが一応次に載せて見るとしよう。此の中から主となるものを取り上げればよいのだから。

石狩本町＝

讃石狩郷	開町記念	石狩町役場前
石狩のあゆみ	案内板	石狩町役場前
彰徳碑	忠魂碑改名	石狩町親船町

戦死者墓碑	十二柱	彰徳碑境内	馬頭観世音
日露戦役〇〇碑		彰徳碑境内	養鮭場記念碑
招魂場	石柱	彰徳碑境内	開校記念碑
手水鉢		彰徳碑境内	二宮金次郎像
燈　籠		彰徳碑境内	無辜之民
?文字消滅	石柱	彰徳碑入口	無辜之民説明板
記念碑三吉神社	神社跡	石狩町親船町	阿部権四郎碑
能量寺	浄土真宗	石狩町親船町	曹源寺
井尻家先祖代々之墓		能量寺境内	馬頭観世音
藤田家累代之墓		能量寺境内	八幡神社
山田文右衛門之墓		能量寺境内	八幡神社鳥居
句　碑	大谷上人	能量寺境内	八幡神社玉垣
金龍寺	日蓮宗	石狩町新町	石狩郷社八幡神社石碑
馬頭観世音		金龍寺境内	燈　籠
天野傳左衛門正庸之墓		金龍寺境内	八幡神社擬宝珠
村田小一郎高令之墓		金龍寺境内	殉職之碑
手水鉢	石狩最古	金龍寺境内	紀念碑
句　碑	加藤有隣	石狩共同墓地	御大禮紀念碑
山田屋万右衛門之墓		石狩共同墓地	八幡神社扁額
窓鶴庵露蕉之墓	山田露蕉	石狩共同墓地	八幡神社神輿
村山家之墓	場所請負	石狩共同墓地	狛　犬
馬頭観世音		石狩町親船町	燈籠軸石
殉國軍馬霊		石狩町親船町	石狩弁天社

林友安墓所	石狩共同墓地		
	石狩町親船町		
元中学校跡	石狩町横町		
小学校校庭	石狩町横町		
本郷新製作	石狩町浜町		
	石狩町浜町		
地蔵堂前	石狩町親船町		
曹洞宗	石狩町弁天町		
二基	曹源寺境内		
	石狩町弁天町		
	八幡神社境内		
	八幡神社境内		
	八幡神社境内		
	八幡神社境内		
石狩川建設部	八幡神社境内		
久保田慶次郎	八幡神社境内		
	八幡神社境内		
	八幡神社拝殿		
	八幡神社		
二對	八幡神社境内		
木戸孝充の書	八幡神社境内		
石狩町文化財	石狩町弁天町		

石狩弁天社の由来　案内板　弁天社境内
弁天社鳥居　弁天社境内
禮拝器（手水鉢）　一對　弁天社境内
御神燈　一對　弁天社境内
狛　犬　一對　弁天社境内
鮭供養之碑　石狩町浜町
法性寺　浄土宗　石狩町弁天町
金毘羅宮碑石　法性寺境内
地蔵尊　三体　法性寺境内
西國三十三箇所霊場の碑　石狩弁天町
境内敷地寄進紀念碑　霊場境内
手水鉢　霊場境内
不動明王之像　霊場境内
観音像　三十三体　霊場境内
太郎代天曝観音　霊場境内
成妙寺　日蓮宗　石狩ヤウスバ

花畔方面＝

開拓百年　青少年会館前
胸　像　飯尾円什　青少年会館前
開校記念碑　花川小学校庭
馬頭観世音　北七条運河添
南線地区開発記念碑　紅葉山公園
吉成多三郎之墓　花畔神社二掌　花畔共同墓地
坂田喜太郎之墓　日露役戦死　花畔共同墓地
オタベリケ丘　三角柱　茨戸病院裏山
耕北農場邸跡　茨戸病院裏山
花畔営農区画整理組合記念碑　花畔北十三線
創田之碑　花畔北十線
團体移住開拓記念碑　花畔北十線
立江寺　真言宗　花畔北十一線
鍾　楼　立江寺境内
西國三十三番観音像　立江寺境内
観世音菩薩像　立江寺境内
弘法大師像　立江寺境内
覚王山立江寺　標柱　立江寺境内
観世音歌碑？　真心でみちびく人のかけはしの
御辺観音岸におさまる　立江寺境内
三十三度　佐野ツヤ　立江寺境内
花畔開村記念碑　花畔神社境内
明治三十七、八年戦役記念碑　花畔神社境内
戦勝記念燈籠　花畔神社境内
五柱地神塔　二基合体　花畔神社境内
太田神社創立之碑　花畔神社境内
太田神社記念碑　花畔神社境内
大鳥居　三基　開町百年　花畔神社境内
出征記念

新道揚水組合

花畔神社碑	花畔神社境内	観音堂
花畔瑞穂神社碑	花畔神社境内	馬頭観世音像
手水鉢　二基	花畔神社境内	観音堂・馬頭観世音像寄進者名
狛犬　四對	花畔神社境内	河潤無盡之碑
燈籠　二對	花畔神社境内	北海道記念木ハルニレ
社誌	花畔神社境内	秋葉神社
開拓碑　岩手團体入殖者	花畔神社境内	皇運無窮之碑　芝田福治宅
花畔地区解散記念碑	花畔神社境内	牛馬塔
生振方面＝		生振放水路工事概要標示板
生振神社	生振五線北一号	石狩川治水発祥之碑
生振神社碑	生振神社境内	石狩川治水由来之碑
狛犬　二對	生振神社境内	石狩川改修記念碑
燈籠　二對	生振神社境内	勢至観音堂
愛知團体移住記念碑	生振神社境内	勢至観音碑　二基
○○記念碑　（文字消滅不明）	生振神社境内	燈籠　六對
聖恩碑	生振農協前	開拓記念碑
五柱地神塔		生振寺　浄土真宗
1？		春光寺
2八線南二号		樽川方面
3三線二号		樽川神社
4五線第五組合前		開村百年記念碑
5？		樽川村移轉之碑
6？		二宮金次郎之像

生振農協前	
生振農協前	
生振農協前	
茨戸ガーデン	
生振三線北	
生振三線二号	
生振三線北	
生振五線北二号	
石狩川堤防	
石狩川堤防	
石狩川堤防	
生振八線北一号	
観音堂境内	
観音堂境内	
生振三線北	
生振六線南二号	
生振三線北一号	
樽川西七線二号	
樽川神社境内	
樽川神社境内	
樽川神社境内	

手水鉢　樽川神社境内
狛　犬　二對　了恵寺　南三条五丁目
樽川神社碑　標柱　樽川神社境内　浄土三部経一字一石塔　了恵寺境内
燈　籠　二對　樽川神社境内　六畜之碑　了恵寺境内
○○○記念碑（文字消滅不明）　樽川神社境内　手水鉢　三基　了恵寺境内
開村五十年記念碑　樽川神社境内　法　燈　了恵寺境内
供養塔　樽川西七線　燈　籠　四對　了恵寺境内
五柱地神塔　樽川神社境内　紅葉山浄苑　了恵寺境内
福田牧場發祥之地　福田藤男宅　経　藏　了恵寺境内
還歴之碑　福田藤男宅　地藏堂　了恵寺南側
樽川発祥之地　樽川公園内　地　藏　了恵寺南側
オタナイ発祥之碑　（未調査）　オタネ浜　創田之碑　了恵寺南側
南花川方面　馬頭観世音　川上鶴吉　南四条四丁目
南線神社　南三条一丁目　竜徳寺　花川
南線神社之碑　南線神社境内　先住民族居住跡之碑　竜徳寺境内
開田之碑　南線神社境内　先住民族供養塔　竜徳寺境内
第二鳥居　南線神社境内　屯田墓地　南三条一丁目
牛馬大神　南線神社境内　東嶺寺　南三条五丁目
町村農場発祥之碑　南線神社境内　永泉寺
五柱地神塔　南線神社境内　北生振方面＝
手水鉢　二基　南線神社境内　豊饒無窮　開田記念碑　北生振大曲り
狛　犬　南線神社境内　開拓記念碑　生振村北十線
燈　籠　南線神社境内　開拓之碑　清野馨　生振村北九線
清野政吉之碑　清野馨　生振村北九線

二宮金次郎之像　清野馨　生振村北九線　馬頭観世音　信教寺境内
生北神社　生振村北八線　神社境内寄進記念碑　標柱　八幡町
開田之碑　生北神社境内　稲荷神社　八幡町
生北神社鳥居　生北神社境内　高岡方面＝
記念碑　佐々木トメ　生北神社境内　高岡開基百年　標柱　高岡一号線入口
五柱地神塔　生北神社境内　高岡開基百年碑　高岡神社境内
稲荷大明神　生北神社境内　開校記念碑　高岡小学校
公共基準点　生北神社境内　高岡神社　高岡村
手水鉢　生北神社境内　高岡神社碑　高岡神社境内
生北神社碑　生北神社境内　燈籠　一對　高岡神社境内
燈籠　一對　生北神社境内　手水鉢　高岡神社境内
狛犬　一對　生北神社境内　狛犬　一對　高岡神社境内
開校記念碑　美登位小学校　鳥居　高岡神社境内
地蔵　北生振　開拓記念碑　高岡神社境内
手水鉢　美登位神社境内　燈籠　二基　高岡神社境内
観音堂　生振玉泉寺跡　地蔵碑　高岡地蔵沢
観音像　生振玉泉寺跡　馬頭観世音　高岡地蔵沢
手水鉢　美登位墓地　牛馬観世音　高岡神社南向い
八幡町＝　観音像　高岡神社南向い
雙樹院三〇〇住居〇欠石墓　八幡町共同墓地　馬頭観世音　高岡五万坪
榎本氏乙女子之墓　八幡町共同墓地　地蔵塔　二基　高岡五万坪
地蔵堂　八幡町共同墓地　馬頭観世音大菩薩　高岡五万坪
地蔵　八幡町共同墓地　馬頭観世音　高岡鳴神家前

地蔵沢貯水池竣工記念碑		高岡地蔵沢
五の沢方面＝		
五の沢神社		五の沢
牛魂碑		五の沢神社境内
五柱地神塔		五の沢神社境内
馬頭観世音		五の沢神社境内
燈籠	三對	五の沢神社境内
狛犬	一對	五の沢神社境内
手水鉢		五の沢神社境内
開校記念碑		五の沢小学校跡
熊神社		八の沢
熊野大神		八の沢
熊大神		八の沢
伊夜日子神社碑	（未調査）	八の沢
八の沢石油礦跡	（未調査）	八の沢

子供の頃に

阿部　徹雄

花畔で生まれて育った住民の一人として、子供の頃の記憶（祖父母や母の話や想い出）を系統だてて書いてみたい、とかねがね思ってはいるのですが、今のところはまだ公私の用務に忙殺されており、とてもそのような余裕のある時間がとれませんので、思いつくままに少年時代の想い出を一つ二つ書いてみます。

その頃私の家は今の北五条二丁目と三丁目の堺のあたり、北陽ショッピングセンターの前の附近にありました。住宅供給公社の花畔団地が造成されてそれまでの地形が一変したので、当時の面影は若葉小学校裏手の防風林の外は何もなくなってしまいました。

国道二三一号線の北六条三丁目停留所のある町道南二号線（現在は南花川団地線）が、今は公社団地にぶつかっていますが、団地ができるまではまっ直ぐ伸びて、防風林の間を通り、南線と言っていた現在の花川南地区に通じていたものです。今でもこの辺は雪の多い地域ですが、昭和の初期の頃にはもっともっと雪が多かった様に思います。小学生の頃は花川小学校に通っていましたが、大吹雪のために児童が下校できず、市街地に住宅のある数人を除いて全員学校に泊ったことがあります。

その頃は教室と職員室と校長先生の住宅などがつながっていまし

たが、職員室と校長先生の住宅との間に裁縫室があって、高学年の女生徒や冬期間村の女子青年がここで裁縫を習っていました。そこは畳敷きの室でしたから、ストーブをどんどんたいて子供達は大喜びでした。その当時は泊りがけの修学旅行など無い時代ですから、学校中を走り廻って大騒ぎをしながら、私も何度か楽しい思いで泊った記憶があります。

又、今は花畔団地になり排水施設も整って雪どけ水もスムースに処理されていますが、当時は三月末から四月にかけて、雪どけの頃には南十線の防風林から今の国道二三一号線の間は、南二号線沿いに毎年沼の様に水が溜ったものでした。特に防風林と町道南十一線の間は南二号線沿いに地形が低く、そのためか約四十米程の巾で開拓当時の原始林が、その頃まだ古い面影を残していました。

私の家の裏の一部に一段と低くなっているところがあって、雪どけ水も最後はそこに集り、小さな池のようになっていい遊び場になりました。蒸発と浸透とで日増しにその池の水が減っていくと、石狩川（現在の茨戸川はその頃はまだ石狩川の本流でした）にいた鮒等の小魚の類がこの池に集ってくるので、弟や妹とタモやザルを持ち出して魚とりに熱中したものでした。又手頃な材料を集めて筏の様なものを造って池に乗り出し、兄弟でふざけあい時には筏から落ちて、早春の水の冷たさにふるえ上ったものです。

この頃には水の引いた林の中も一斉に若芽が萠え、まづ残雪の中で猫柳が芽をふき福寿草が咲き、フキノトウが顔を出し、当時正確な名前がわからぬままに適当な名前でよんでいた水色のエゾエンゴサク、オオバナノエンレイ草、小さな赤黒い花のエンレイ草、スミレやミズバショウなどが、池の周囲から林の中一帯に咲き乱れていました。融雪後の農繁期を迎えた農家では、もう大人も子供も自然の花園をゆっくり観賞する余裕のないままに、年々歳々大自然は思い思いの花を自由に咲かせ、そして自由に散っていったのです。

それからもう一つ、これは全く私の個人的な想い出ですが宝の山の話を書きます。私の家のあった農業の本拠地は今の北六条、北五条附近でしたが、少し離れて現在の北四条一丁目、道道石狩手稲線と防風林の接した一角にも三・五ヘクタール程の畑がありました。この畑の中程に一、五〇〇平方米程の広さの杜（大木は二十本程しかなかった、と思いますがここでは杜と書いておきます）があり、ここは開拓当時森友さんという人が住んでいた屋敷の跡だ、と母から聞きました。森友さんの家は当時もうありませんでしたが、私達の本家がそこから近かったので、この杜を本家の方の山と兄妹で呼んでいました。これが大変楽しい杜でした。開拓当時の自然をそのまま残したわが家の裏の林とは違い、そこは荒れてはいましたが、自然の杜ではなく明らかに人工の加えられた杜でした。マッチの箱の様な形で大きな木は二十本程、あとは笹や灌木や雑草に埋れ、人の歩く跡もついていない杜でした。どうして畑の中にこの杜だけを残しておいたのか不明ですが、この杜の中は森友さんが植えたいろいろな植物が堂々と、又はひっそりと主なき杜に息づいていたのです。

子供の背の立たない程の雑草や蔓草が茂っており、荒れるにまか

せたままの杜という状態でした。記憶にあるのは小学校の三、四年生の頃だったのでしょうか、未知の世界に足を踏み入れるという強い好奇心にかられながら、弟と中に分け入りました。森友さんが住んでいた頃はそれなりに手入れをされていたのでしょうが、その後永い間人目にふれることもなく経過していたと思はれる草花類、石竹や百合や矢車草などが咲いており、雑草の中に一と際目立つ実に見事な大輪の白百合がありました。これは後年堀りとって我が家の庭に移植し、その後永い間毎年美しい花を開いて家族の目を楽しませてくれました。たべられる植物も甘い桑の実やサンナシと呼んでいた小指の先程の大きさで、熟れると甘酸っぱくなる木の実、赤い実のなるオンコ、春に美しい花を咲かせ、秋には親指の先程の大きさになる小リンゴとも呼んでいた海棠。外に小玉と大玉のグスベリ、カリンズ、幾種類かのグミの木、青い実が熟れると赤くなる野苺（これは今でも方々で見かけますが）青い実が熟れると黒くなる熊苺、山ブドウにコクワ、スモモや梨の木は棒で突ついたり登ってとって食べたものでした。その外にもいろいろあったと思いますが、全く雑草や灌木喬木に埋れた杜の中に実に豊富に季節季節の花が咲き、実をつけて子供達の好奇心と冒険心そして食慾を十分に満足させてくれた宝の山でした。

その頃のある年の秋、それまで見たことも聞いたこともなかった木の実が二〇個程なっているのを見付けました。これは父に知らせて初めてアケビだとわかりました。父も母も北海道生まれなのでアケビの実を見るのは初めてのようでした。今でも北海道では珍らしい果物だと思っています。これは森友さんが農閑期の副業としてアケビ細工をするため、故郷から苗木を取り寄せて植えたものが、そのまま実用化されずに埋もれていたもので、永年の風雪に堪えて北国の風土に定着して実をつけたのだと思います。モンキーバナナに似た形の青い皮が紫色になってくると果肉がまっ白くなり、ゴマ粒の様な黒い小さな種が中に入っており、熟れるのを待って家中で食べたものでした。とに角それまで見たことも聞いたこともない果物に、宝物でも発見したような興奮をおぼえたものでした。人に知られると珍らしい果物だけにとられては困ると思い兄妹の秘密の果物として誰にも話をしない様にしていました。

そこも今では花畔団地の集中煖房地域となり、私達兄妹の想い出の宝の山も今は跡形もなくなってしまいました。今これを書きながら小学校に入った孫達に、あの宝の山の探険をさせてやりたかったなァと思っています。

ふるさと探求

村井喜久司

地元の人々が協力し、その地の文化を互いに学びながら、それぞれの文化を守り、育てていくことが今ほど必要になっているときはないと考えられます。

昔「高い山から谷底見れば、瓜や茄子の花ざかり」と、唄われたが、今や巨大ビルや高い木ばかりが目につき、それを支えている土地は全く見えない。大地がなければ何ものも存在しないことは意外なほど大地に無知であることに気がつくことがあります。

たとえば、歴史も常に俯かんの視点からのみ書かれてこなかったでしょうか。巨人の歩みも歴史の重要な部分に違いがないが、その両脚を支えつづけてきた、勤勉でものいわぬ民衆の存在も歴史的事実であります。

文化もひとりひとりの人間の活動によって形成されてきたはずです。英雄や権力の交代だけが歴史ではないのと同様に、いわゆる中央にあるもののみが文化でないはずであり、このことは、私たちが身につけはじめた最も価値ある常識の一つだといえないでしょうか。

民衆が生き、死んでいったさまざまな姿へ目を向け、明らかにしていかなければ、歴史や文化の真の姿もわからないはずであります。草の根分けて、歴史を、民俗を、伝承を、文芸をひとつひとつ拾い出していく、地道な活動をくりひろげなければならないと思います。

最近の現れとして、各地で地域の歩みを自分達の手で掘り起こし、子供達に伝えていこうということで勉強会が行われています。

とくに、「昔話を子孫へ」という意図から実行が盛んで、民族の伝承とまた違った意味で、昔話が生き長らえて、各時代の子供達に夢を与えてくれることを思えば、非常に意義深いことと思います。

その担い手が老人であり、子供達であるというところに、今後の明るい展望が見られ、確かに伝承されていくのだという感触が得られる。この昔話の伝承のなかに、現在忘れかけようとしている一家団らんの場での家族との話し合い、核家族でコミュニケーションが不足とされている祖父、祖母、と孫との語り合いという微笑ましい場の出現も見られます。

また、反面教育面から見ても、

1、家族間の話合う機会が多くなり、また話題となる。
2、他人よりの語りをよく聞き、作文する能力が育成される。
3、他人と逢うことによって、礼儀作法も身につき、感謝の念が湧く。
4、地域内での老人と子供達の交流が始まる。
5、昔話による創作絵を描かせることによって創造力が育つ。

等々の効果が聞かれます。

郷土文化の伝承は多くの人々の協力の下で行われ、その活動が社会的意義はもちろん教育面でも生かされ、目下失われつつある現代の精神面の「ゆとり」が生まれ、社会性の育成にも役立つこととなりましょう。

以上のような意義を一人一人がよく心して郷土文化の見直しを試み、それが明日への豊かな展望につながるはずと考えられます。

昔を偲んで

福田　佐市

石狩町と札幌の境界を流れる発寒川は昔は天然川と言った。そして大昔手稲山が大洪水になって流れ出たのが今の砂山である。昔はその山は手稲町から続いていた。その一部は今の花川病院とか石狩南校の辺りである。それと関連して出来たのが今の発寒川で、今は殆ど改修されて真直だが昔は曲りくねった川でした。それを称して天然川と言っていたのですから、昔は必ずと言っていい程春水がついた石狩町側は山にさえぎられ水はつく様な事はなかった。手稲山から雪解け石狩川は満配ですから1m以上の水でした。そこで石狩川から鯉が上って来ると言う話があって友達同志でイカダをつくって長いフォーク手によく鯉を獲りに行った。しかし何百ヘクタールもある広大なところでは一度も見る事は出来なかった。そう言う訳ですから当時の農民は春は大変な事であったと思います。今はその地域には病院も出来、団地の一部も経去されていますが、とに角昔はそう言うところがあちこちにあった様です。先程の砂山と言う事についてふれてみたいと思いますが、我々が住む此の地球は出来て四億年と推定されるが、これは道新に掲載されている事ですが大昔、手稲山が大洪水に遇って流れ出して出来たのが此の砂山である。今は団地化されてその面影はないが、又今の北の団地の三角山は最も

その下流である。又此の山の層には小さい砂利があって、その砂利を採集して商売にして売っていた人もいたが、量的に少なかったので途中で止めてしまったが、地形から言うと南校辺りはその一部でもあった。又、昔は此の地域は水が悪いので堀抜きを堀ると地下から小さい貝ガラが出て来ました。又、北海道のあちこちに恐竜と想像されるもの、或いは象鯨等の物体もあちこちに又、近くの当別では標高五〇m のところから5m 以上もある鯨の化石が保存されている。これが実証されるものとして、北海道は本州と地続き千島列島、朝鮮半島南は東南亜細亜全域に亘り地続きであった。それが自然破壊かその他何かの変動に依って、此の様に分断されてしまった。我々が住んでいる此の地球は、平凡の様で又恐ろしいところでもある。特に日本は火山列島でもある。いつまでもこのまゝであってほしいものです。今も何処かで地球は破壊されているのです。

著述に対しての私的メモ

長谷川　嗣

安保闘争が敗戦に終り若い人達に取ってはつゞいての二度目の敗戦の終了であった。この人達の闘争心の挫折が十年位で立戻れるかと思ったがそうとは行かなかったやうだ。市町村史でも中年以上の人で基礎のある人は何とか研究に立直って少しづつ仕事をつづけて居る。而し学生年代はなかなか立直れず特に直接闘争に係わった連中は今だに立戻れずに居る。社会正義への闘争心と学問への向上の探求心とは辿る道筋だけの違いではなく、人生への終極の理想さへ異って行くかに思へるのである。その為にか近頃出版する本は特に安易であった。戦時中嵌口令をしかれて居た碩学連の本が一しきり出た後なので、特にそう思ふのであったかも知れないが、又昔のやうに生涯を賭けた著述にはそう出会えないにしても近来の本は少しお粗末すぎるやうに思はれる。又若い人達が学究に立戻れない最大の原因は生活に追はれて研究に立戻れないことでもある。而し之は自分で苦労して立直らねばならないことであるし、道草を喰った者の代償として仕方のない事と考へねばならないであろう。さうして又立直った時には歩んだ人生経験の幅の広さが活かされるのであって、貴重な資産である筈であり、大学で学んだ歴史学とか考古学とか呼ばれ、又人類学とか、地理学や言語学と細分された基礎的な惣

而の専門部間との統合する力である筈である。何故こんな言はでもがなの事を書き立てるかと言ふことは、近頃の若い人は気短に金とか地位とか言ふ効果を求めて代償の遅い事に生涯をかける様な愚かさには行かないし、世間でも持て囃さないのである。然し又別に老人の脳訓練の様な我々の仕事では斯界の進歩発展はないのであって、若い世代からも私のやって居る様な仕事にも稀には興味を示す人の出ることを期待して居ることに他ならないからである。出来ることならやっと私が知り得た知識を少しばかり後々に残したいからである。

余話は止めて本筋に戻したい。近頃一寸見たいことがあって「古代甲斐国の謎　甲斐丘陵考古学研究会編」を読んで驚ろいた。一昨年頃から地味ながら内容の充実した本がボツボツ出版され始めたのであるが、之等は特に地方の出版本や自費出版に多く見られる様になったのである。昨年暮に出された前川さんの「石符俳墳誌」などはその最なるものと思われるのであった。この「古代甲斐国の謎」は頁数二七三頁で蒐められた資料の充実さは実に八十二冊の多きに及んで居るのである。私には考古学の基礎などは皆無なので何の批判も出来ないが、対比させた文献は信頼されるものばかりなので何かの参考にメモしておいたのである。又縄文前期の土器のイノシシ、ヘビ、ヒトの文様、後晩期に描かれたイノシシ、クマ、イヌ、サル、ムササビ、セミ、カマキリ、ゲンゴロウ、カメ、オットセイ等の文様、弥生時代の銅鐸に描かれたトンボ、カマキリ、クモ、人物、サカナ、サギ、イヌ、イノシシ、シカ　スッポン、トカゲ等々が本道での擦文土器に　文様があれば詳しい考証も見せて欲しいのである。又、別して自分の何かを発表する機会に恵まれたとしても、生涯をかけて調べた資料でなければ、仇おろそかには活字に書き残したりは出来ないものであると考へたことの心覚えでもある。

天平十年駿河国正税帳　七三八年
正倉院文書甲斐國図解
〃　宝物銘文集成　七五二年
〃　（四）
万葉集防人歌九八首「天平五、六年」　七三三、四年
東大寺要録　天平勝宝四年四月八日附　七五二年
続日本記　七八九年
日本後紀　七九七年
類聚国史　七九八年
日本紀略　八〇二年
類聚三代格　八二七年
続日本後記　八三三年
三代實録　八六四～八八六年
扶桑略記　九〇一年
古今和歌集　九〇五年
延喜式　五十巻　九二七年
仁和寺文書　九六九年
類聚符宣抄　九七五年

權　記	一〇〇〇年	今昔物語　森本六爾
御堂関白記	一〇一七年	日本原始農業　昭和八年刊
左　経　記	一〇三一年	日本古代農業発達史　直良信夫
小笠原系図	一〇七五年	略　報　昭和五五年
勝沼町白山平出土経筒銘	一一〇〇年	歴史手帖　13－1「方形周溝特殊ノ墓」　中山誠二
中　右　記	一一〇二年	坂井　農民考古学者　志村滝蔵
僧寂円経筒銘	一一〇三年	和名抄　「倭名類聚鈔」
武田系図	一一一〇年	一宮町誌
尊卑分脈	一一二七年	「甲斐の古墳」一――甲府北東部に於ける積石塚の横穴式古墳の調査　昭和四九年
公郷補任		甲府の古代遺跡　昭和二四年
長　秋　記	一一三〇年	甲斐国志「江戸時代の代表地誌」
大聖寺過去帖	一一四九年	シンポジューム「古代東国と大和政権」　一九八二年
保元物語	〃	巴瓦製作の一考察　「郷土研究」　中島正行
兵　範　記	一一五七年	日本の歴史　中央公論社刊　青木和夫
平治物語	一一五九年	図説日本文化史大系　井上光貞
長寛勘文	一一六三年	史跡名勝天然記念物調査報告　第一輯　大正十四年　中島正行
吾妻鏡	一一八〇年	
日本先史土器の縄紋	山内清男	甲斐国分寺瓦　址発見経過報告
蛇	吉野裕子	〃？郷土研究　第二号
土　偶	米田耕之助	総合郷土研究
銅釈の絵物語	佐藤　真	甲斐史学　第三号
古事記・日本書記　「白猪と虻」		残簡風土記

古代官牧制の研究（八〇三）　磯貝正義
裏見寒話「宝暦年中地誌の五」
甲斐名勝志「巻の四」
韮崎市誌
近江文書　紀ノ貫之歌集
山城図　法勝院領目録
宇治拾遺物語
今昔物語集
増穂町誌　磯貝正・義
大月市誌
日本歴史「四二六号」
大日本地名辞書
地里志料
富沢町誌
古空百語「幻の壷」
静岡縣史跡名勝天然記念物調査報告初集　一九三三年
甲斐路　五二号
山梨の考古学
埋蔵文化財関係統計資料　文化庁
以上

花畔古老昔語り

―藤井リエさんの巻―

吉本　愛子

花畔一七八番地、わかり易くいえば運輸省航空保安施設のすぐ近くに藤井宅をお訪ねした日、リエさんは赤ちゃんを抱いておられました。「お孫さんですか」「いいや曽孫さ」お孫さんが、二人の坊やを連れて見えている処でした。とてもそうは思えないお元気なリエさんですが、子供の頃から大変な苦労をされた人と聞いております。今回は御主人のお話も交えながら御紹介したいと思います。

奉公奉公の十余年

リエさんは大正四年十月一日石狩町矢臼場で生れました。家は燕麦などの畑作農家で、西本といい先祖は熊本県出身という事以外は何も知らないそうです。というのも、彼女が十才の時父熊夫さんは足の病気で死亡したからで、彼女の下には三人の幼ない弟たちが残されました。父の足は、大学病院へ行っても小樽の有名な外科へ行っても「膝から下を切断しなければ命に関わる」と診断されながら、それを拒んでのことでした。

毎朝リエさんのおさげ髪を結って学校へ送り出してくれたという優しかった父親は、三十五才の若さで世を去ったのでした。

リエさんは小柄だったことから九つで、石狩小学校にあがりました。けれどそれも父の病院代を稼ぐため僅か三カ月で辞めさせられ

子守奉公に出されてしまいました。

最初兵村（北区屯田）の吉田さんに奉公しましたが勝気なリエさんはそこの男の子と喧嘩ばかりするので間もなく近くの中谷さんに移されました。ある日、中谷さんに連れられて了恵寺にお参りに行った折に、同じくお参りに来ていて、リエさんの家庭の事情に詳しい内海秀太郎さんが「この子は二つの時、母親に別れ、父にも死なれた可哀想な子だから、どうか宜しく面倒を見てやってほしい……」と中谷さんに話しているのを聞いてしまったリエさんは、その時初めて自分は継母に育てられた事を知ったのでした。そして、それ迄気にしていなかった母の言葉のひとつひとつに思い当たる節をみて、愕然としたのでした。それで冬になっても家には帰りたくないと、三番通りの出口の石川さんで年を越し、十一の春からは、向い矢臼場といっていた八幡町の清野さんに奉公する事になりました。当時は馬喰もしていて、やせた馬を買ってきて、肥え太らせて売るので馬の世話なども仕事のうちでした。小柄なリエさんが、赤ん坊をおんぶすると、その足はリエさんのふくらはぎまできていたそうで、そんな小さな女の子が子守をしながら、馬追いや牛追いをする毎日は、どんなに大変だったことでしょう。

その秋、草切り機で秣を切っている時、後ろから馬に草を引張られ、それを引張り返えし、その弾みのまま押し込んだ草と一緒に、自分で左手の人差指を半分切り落してしまいました。落ちた指先は探しても見つからず切り口からは血が一滴も出ないので、三平皿に馬の怪我に使うクレゾールを入れ傷口を洗いました。真白い泡がたち、二三回手を振るうちに、やがて血が流れ出し、その赤い血を見て、やっと我にかえり、デントコーン畑にいた女主人に知らせました。渡船で川を渡り石狩病院に連れて行かれましたが、ダルマ医者と呼ばれていた鈴木信三先生が、麻酔も何もせずに傷口を縫うので、指を落した時はひとつも泣かなかった気丈なリエさんも、あまりの痛さに最後まで泣きどうしでした。

「あの時の恐ろしさと痛さは今でも忘れられないね。痛かったさあ」母親に「危ない仕事はするな」といわれてはいても、それを口にすると「金を貰って働く者が、あれ駄目、これ駄目って話があるか」と主人に叱られて間もなくの事故でした。

その年の暮れ、家に戻ると知らない男が居て、苗字も赤沼に変っていました。「母ちゃん一人ではどうにもならないから、一緒になった。父ちゃん父ちゃんって絡まれ」といわれても、既に奉公奉公で散々苦労を重ねて来たリエさんは「心が年寄ってしまって、とても父ちゃんなんて呼べないわけさ。だから随分憎まれたもんだった…」

翌年十二の春から五年間、今度は花畔村北二線の田中さんに行きました。子守の他、農作業もひと通りやり、一服休みのおやつに食べた蕗の葉に包んだ塩味の金時豆も、今は懐しい思い出となりました。

冬、農家が暇になり家に帰されても、何もしないで冬を越した事は一度も無く、森へ薪にする木を採りに行ったり、寒修行で忙しい金竜寺のご飯炊きに出されたりしました。

十四の冬には富樫佐一郎さんに連れられて矢臼場から手稲駅まで歩き、小樽のパン屋さんで働きました。農家の事しか知らないリエさんにとって街の生活は初めての事で、数々の失敗を重ねそこで謝るという行為を覚えたのでした。昼は店番、夜は富士館通りの映画館の前で、パンジュウという今のお焼きの様なものを焼いて売りました。映画の跳ねる夜十一時頃にはいねむりをしてしまうので、親方が時々様子を見に来て叱られました。

「それでも大した上手に焼けるようになってね…」彼女は屋台でパンジュウを焼く仕草を楽しそうにして見せました。

十六才の頃の年俸は三十九円で、兵村に子守に行った頃に比べ二倍になっていましたが家に仕送りするには十分とはいえませんでした。新しい父を迎えてから次々と弟妹が生まれていたのです。それでもっと給料の貰える家でと十七才からは烈々布の古瀬さんという水田と玉葱の農家で働くことになりました。そこでは年七十円とリエさんに同情して着物も与えてくれました。けれど仕事はそれなりにきつく、玉葱畑は粘土地でその硬い塊りを叩いて砕く仕事が終日続き、指も腕も動かなくなる辛い毎日でした。そんな重労働に耐えて届けた米三俵の後に残っていた五円の賃金までも父は取りに来たといいます。

くなしりにて

昭和十年二月、当時二十一才のリエさんは国後島まで出稼ぎに行きました。田塚という蟹工場の親方が、漁業会を通じて募集したのに応募したもので、女性は十三人、その中には夫婦で来ている人もいました。同じ部落の橋本さんは敷布団、リエさんは掛布団を持って行きました。一行は汽車で根室まで行き、ヤマト館という旅館に一泊、そこでリエさんは生れて初めて活動写真というものを見せて貰いました。島に渡って、映画館や、旅館もあれば、遊廓もあった古釜府という漁港の近くに、リエさんたちの働く蟹缶詰工場がありました。リエさんの仕事場は工場の外で、午後三時頃船から降ろされたタラバガニを、網から外し、次にカネのわらじを履き、大根を抜くように甲羅と足に分ける仕事は、大漁の日だと翌朝の三時頃まで続きました。その間二～三回手袋を取替えなければ、ボロボロになり、凍えていることをきかなくなった手は、わざと台にぶつけ火照らせたという悲壮で生々しい体験談は私の胸を打ちます。手を洗う時間も惜しんで寝床に入ると、朝の六時にはもう起こされました。休日などは勿論なく、大時化で漁が出来なかった日に一度だけ映画をみせてもらいました。「朝の三時まで夜業して、夜業の手当てに何貰った、にぎり飯二つか情け無や… わしらそんな歌作ってうたったもんだ」この時私は、父が一度うたってくれた「女工節」を思い

出しました。
実はこの歌が、今度藤井リエさんを訪ねるきっかけとなったのでした。

工場の窓から沖見れば
白波けたてて旗立てて
今日も大漁の蟹の山
あら　可愛いい女工さんまた夜業

いくら夜業が続いても
主さん乗ってる船ならば
どうぞ大漁をしておくれ
あら　私の工場で共苦労

女工女工と見下げるな
女工の詰めたる缶詰は
横浜検査で合格し
あら　女工さんの誉は外国までも

朝は早くから起こされて
夜は十二時まで夜業して
腰がだるいやら眠いやら
あら　思い出しゃ女工さんいやになる

故郷離れて来ておれば
文の来るのを待つばかり
たった一度の便りでも
あら　今日もまた来るやら来ないやら

私の父にもう一度再現して貰いましたが、千島一帯の蟹漁の盛んな頃、そこで働らく女工たちの姿を見事に伝えています。

リエさんは、「工場の窓から沖見れば、蟹とり発動機大漁ばた、それ見て親方えびす顔、女工さんも職工さんもふくれ顔」とこんな歌も教えてくれ、その工場によって異なる様々な女工節が作られうたわれていたのでした。

仕事も手早く、真面目に働くリエさんはどんな作業も一番になり、十三人の中で一人だけ、親方の奥さんが縫ってくれた掛布団側や、銘仙の着物をおみやげに貰い、それは後に嫁ぐ日の柳行李に納められました。

朝食の後は寝ている間に熱処理された蟹の足を胴肉、一番肉、二番肉、ラッキョ、爪と五段階の肉に分け、工場に届けその後は網の整理など休むひまもありません。工場内には百五十人の女工が働き、アイヌメノコも一緒でした。島には笹屋根のアイヌの家があちこちにあり、持ち主があるのか無いのか馬が放し飼いの状態でした。春になるとその馬を畑仕事に使っていたようなので、野生の馬ばかりでは無かったようです。朝方、波の引いた渚で、ホッキ貝拾いや、いもの種まき等の仕事もあり、ホタテ貝の耳を肥料にしていたそうです。六月末帰郷。成績が良かった彼女に、来年も来てほしいと、

直接国後の親方から前金で四十円送って来ました。そのつもりでいたリエさんに縁談があり、困っている彼女の為に、相手の人は家に内証で三十円の結納金を五十円にして、前金を送り返えしてくれたのでした。

漁師の妻となって

昭和十一年、十線浜で漁業をしていた藤井初太郎さんと結婚。九つで子守奉公に出されてから十三年、安らぎの家庭というものを知らずに来たリエさんにようやく落着ける家庭が出来たのです。二十二才の初春でした。

初太郎さんの祖父は越後の人で、明治の初めこの地に入植し、山林を貰い、漁業の傍ら越年は木を伐る仕事をして、冬の間六尺の薪を作り、春になると高島の方から鰊船が、それを買いに来たときいているそうです。その祖父は初太郎さんの父が十三の時、山でパンを拾ってきて食べて死にました。見上げても青空を見ることが出来なかったというその当時、猟師がムジナを獲るために置いた毒パンではないかということでした。毛皮が防寒衣料になる狸やキツネ、兎などは、昔から人間に狙われていたのでした。初太郎さんの父親も、北九線の森で大きな木のうろから一度に七匹のムジナを生捕りにしたそうです。

明治四十二年生れの初太郎さんは十五の春にはもう張碓の鰊場に出稼ぎに行き、銭函の駅から張碓の番屋まで、一枚一貫目（三・七五キログラム）かかる、たて筵というニシンカスを入れる筵を十九枚背負って歩いたという力持ちで、二十五才には一人前の船頭になっていた人でした。しかし逞しくそして優しい初太郎さんとの結婚生活も、まだ安住の場ではありませんでした。農家の事なら誰にも負けないリエさんも、漁師の生活は新人で「そんな事も分らんか」という姑の言葉に何度も辛い思いをしました。その上長女えみが生れた十二年に夫は兵隊に行ってしまったのです。日中戦争を体験し、南京まで送られた初太郎さんでしたが、十四年十二月に無事帰還。次女ふみが生れほっとしている間もなく十六年六月に再び召集。その頃には藤井さんの両親は亡くなっており、リエさんは生活の為漁場の鮭積みを始めました。

十線浜で獲れた鮭を馬車で銭函まで運び、帰りには番屋で焚く石炭を運んだのでした。森の中には銭函まで通じる道路があっても悪路の為、渚ぞいに通った方が速く、「赤ん坊おぶって海の水ザブザブこいで…　冷たくて足も何も覚えが無くなってね…」

十線浜にあった　岩館漁場と北五線にあった　竹田漁場の二軒かけ持ちで働きました。銭函へは一日一往復しか出来ないので、その合間に矢臼場の横田さんに一本二十銭の手数料で鮭を卸し、その手数料はちりも積もればで三万円になっていたそうです。

馬を倒してしまっては仕事にならないので馬の世話をするため毎朝二時に起きました。その頃「獲れて獲れて銭函から戻るともう鮭の山さ」後獲りといって十一～十二月の寒い時期の鮭は鮮度がそう変らないのでそのまま山積みされていて、それを翌朝六時には馬車にバラ積みして銭函に向いました。その頃は夜半に海が時化そうになると、船に屋形と呼ばれるズックのテントをかけて沖に泊り、弁

当を持ちストーブをたいて待機し、時化が来ると網を揚げ、大切な網を守ったのでした。「今の網は流される心配無いからそんな事しないけどね」

二度目の召集で旭川第三部隊に入隊した初太郎さんが、「秋に戦地に送られるから、子供を連れて面会に来い」というので出かけたリエさんでしたが、そのまま動くことなく、十七年五月家族の元へ帰りました。

初太郎さんの生命運は実に強く、三十六の時、夜の時化の海に落ち、一時間以上も泳いで助かったという経験があるのだそうです。落ちたのは十二月十六日で「どこもぶつけないでスパーッと落ちた時は気持ち良かったよ。海の水は案外暖かかったさ」と語る初太郎さんに「生きて帰れたからそんな強がり言えるんでしょ」とリエさん。「うん、あん時の苦しさは戦争どころで無かったねアハハ…。だけど浜にあがった時は正気だったよ。足跡もつかないパンパンに凍った浜だったけどね」夜の海で櫂一本につかまりながら、肩までかかったゴムの胴長を脱いだが、足先からはどうしても外す事が出来ないので、櫂をお腹にはさみ、海底に座り込み、やっとの思いで脱ぎ捨てました。七人乗った船の船頭であった初太郎さんは責任感から、死ぬ訳にはゆかないと、荒狂う波間を必死に泳いだのでした。この事故は銭函まで点在していた番屋に次々と伝えられ、夜十二時過ぎ、銭函から親方が駆けつけた時には生きた初太郎さんと対面したのでした。浜辺のガス燈に灯をつけ、木を燃やし、船を迎えるリエさんの処に、いつもの威勢の良いかけ声は無く、しょんぼり帰った仲間が「船頭を海に落してきた。見つからないのであきらめてきた」と告げました。

シナ事変から生きて帰った初太郎さんが、こんな所で死ぬはずはないとリエさんは思ったそうです。

稲作農業をめざして

こんな事があってから、漁師仲間には鬼船頭と呼ばれていた初太郎さんでしたが、前々からの夢であった農業をやりたいという気持が強くなり、借金で一町三反の土地を買って半農半漁の生活を始めました。他人の土地ばかりで働いてきたリエさんも、いつかは自分の土地で働きたいという夢が実現したのでした。リエさんも七人の娘を育てながら、出面に歩いて頑張り、後には四町歩の田を持つまでになっていました。しかし新港開発のためこの土地も手離し、今は恩給と年金で静かに暮しておられます。昭和二十年代には網を揚げると山ほどかかりお金にもならず捨てていたという〝ワタリガニ〟も今は見られなくなり、昨年北三線で漁業を継いでおられる娘さん夫婦が二匹網にかかったから二人に食べさせたいと届けてくれたそうです。

現在お二人には十八人の孫と、この五月には三人目の曽孫が生れる予定とのことです。

ペーパーフラワーを楽しみながらのんびりと一日を過ごすリエさん（71才）を、ストーブに薪をくべながら優しく見守る初太郎さん（77才）でした。

私は何かほっと心まで暖かくなって、藤井宅を後にしたのでした。

開拓と漢方草木

沖本　義久

現在の石狩町高岡に入植した（明治拾八年）開拓団の中に竹中与右エ門は漢方医学と柔（今では柔道）に丈けてた方でした。亡後二代目長男瀧次郎が後を受け漢薬の調剤を永い間行った其の名残か、現在の各農家の廻に薬草薬木が現在若い方には、わからないまま残ってます。当時の漢薬は下毒剤及強壮剤、婦人の血の道に等々の調合し丸薬とし、これらは石狩町はもちろん、当別の一部と厚田村各方面の方達も恩恵によくしてた。滋養強壮には朝鮮人参甘草、サフラン、白蛇カラス蛇、川芎佳皮丁香当帰今夏等で粉末配合し粘薬にし五蔵円と言ふ薬名で註文に応じてた。一般には、下毒剤が多かった様でした。今より二十年前位迄薬草薬木の利用は有った。其の頃はよく、納屋のノキ下等ニ薬草ノ陰干が下ってたが今では大根葉の陰干すら無くなってる。又当時はマムシ酒の土中に入れたのをお互に記憶し合い、数年後堀出し人より馬の病の気付剤に利用してた事を思ひだす。農家が利用した薬木薬草の跡が今も残ってる。それらは開拓又は其の後入植した方達の住居跡には必ずスモモの木が有りますが果物を兼ね種の中の仁核を薬用にしたグミの木の下等にコジヤクを植へ春一番の野菜を兼ね消化強壮老人頻尿薬に花昌、家の廻りにドクダミ（十薬）が有一般の毒下と、オデキの吸出に山ゴボウ（商陸）は花畠のスミに植へ腎臓の弱い人に小豆といっしょに煮て食事療法とした。夏水仙は、腰痛又は関節炎に（毒）婦人の制ガンにヒシの実を食し利用してた。これらは漢方学に丈けた竹中家の指導によるものと思ひます。高岡の畠の下水淵や地蔵沢の水田の高目の畦に生へているハッカは、昔生産物として植へた名残で有、昔より山野の薬草木を相等利用したが現在も可成の草木があります。高岡だけ見ても糖尿に効く、ヒヨドリ花草、タラの木根皮、健胃、去痰、強壮に、ツル人参、トチバ人参、ホオの木、キンミズヒキ草、感冒に鳥足升麻とウド根等、打身にシコロ木、目の薬に野ブドウ根（めくらぶどうとも言ふ）、利尿にオオバコ、スギナ等血止に血止草、オトギリ草、又はガマの花粉等有、血圧降下にクワの木根皮、肩コリにマムシ草、制ガン作用にカワラタケなど有ります。末だ山野には草木キン類が山積してます。趣味と健康を兼ね山野を走り、廻るのも良いものです。

特別寄稿

誇るべき文化遺産の発掘

前川道寛著「石狩俳壇誌」に寄せて

大森　亮三

著者は石狩町生振の春光寺住職で、大正三年生まれ、石狩町郷土研究会の会員である。

「あとがき」によると石狩町は海と川にはさまれ、鮭の街として全国的に知られ、本道開拓当初は政治行政面でも大切な役割を果たした文化の街でもあったはずなのに、文学的資（史）料がほとんどないと聞かされ、そのことの信じ難さを解明したいというのが、この仕事に取り組む動機だったという。

それは、昭和四十三年頃のことで、以来二十年間、前川氏は資料収集とその解明整理に情熱を傾けてこられたのである。

当時町史編さんの任に当たっておられた田中　實氏（前町助役）や花川の了恵寺住職高木憲了氏（元町文化財保護委員）などの助力、励ましによって貴重な俳句資料が次々と発見され既に散逸が始まっていた古文書類を手にして、著者は大いに感動し、その解読に取り組んだのである。

この古文書の解続が大変厄介な作業で、北大北方資料室にくり返し足を運び、また高倉新一郎氏の私宅を訪問して教示を受けられ、その他、谷沢尚一氏（日本歴史学会員）、森山軍次郎氏（専修大道短大教授）、山岸巨狼氏（俳人）、その他多くの先生方の助力を得られたそうである。

石狩俳壇の頂点をなす『尚古集』（明治三十五年発刊で物故会員十二氏の追善句集。選句三千五百余句。昭和四十六年能量寺改築の際に発見されたもの）の解読を契機に、次々と現れた資料によって、石狩俳諧がどのようにして発生し発展の道を辿ったものか等、町史資料（年表等）から得る点もあったようで、俳諧と産業や行政との関わり、また人事交流との関わりなどについても徐々に解明されていったのであった。

『石狩俳壇誌』はそれらのことを、資料に基づいて、遠くは元禄にさかのぼるが、主として江戸末期から昭和七年までを、年代を追って政治・経済・人物などとの繋がりの中でとらえ、興味深いエピソードなども加えて詳述している。

特に俳句結社『尚古社』の句会作品など年次毎に作者名とその所在地名を含めて、つぶさに記載していることは、夫々の時代の選者がどのような季題を提示したか、また投句者がどのような属目や視点を句作に盛り込んだかを知る上でも、得難い資料であり、読んで尽きない興味を覚えるのである。選者のことをいえば、この著書に上げられた石狩俳壇の選者には、明治年代では東京俳壇における有数の俳人の名が見え、大正年代では道俳壇の現代化に大きな貢献をした牛島滕六、青木郭公等の名が出ていて、石狩の俳人達が、いかに広い視野を持ち、進取の精神に富んでいたかがわかり、読んでいて晴々する程である。

また俳句のみならず、和歌や情歌（都々逸）などの資料もとり上

げており、往時の俳人の多彩さも知られるし、結論として、石狩の俳句が東京の旧派俳壇と直接に関わっていたことや、その後の動向の記述を通して、明治から大正にかけて石狩が道内俳句運動の中心的な役割を果たしていたことを知らしめ、当時の石狩俳壇の位置づけを明確にしたこともこの著作の大きな収穫の一つであろう。

目次にそって、もう少し内容を当たってみると、つぎの通りである。

「石狩俳壇の流れ」

これは最初の項目であるがここでは寛永年間から昭和期に至る石、狩俳壇の流れを概観しており、後述される年次毎の解説を一そう理解し易くするもので、（漁業と人と俳人と）、（村山家と井尻家の役割）、（「月耕集」）、（逃亡の人井上伝蔵）、さらに（俳界の激動期と尚古社誕生）、その他の小項目により、石狩俳壇の発生、意外なエピソード、中央俳壇の動向と石狩俳壇との関わりなど、一読して全体像を総括出来るようになっている。また、正岡子規、角田竹冷、星野麥人、巌谷小波といった名前も出てきて興味をそそられる。

次は、「石狩文化の黎明と俳諧」、以下「大正・昭和の俳壇」に至る七つの項目によって、元禄七年から年次を追って、資料を駆使して、重要な諸事項を記述しており、それは昭和七年まで続くのである。盛られた政治行政上の出来事、産業の興亡、石狩町災害の記録、主要人物の消長往来、そして俳句結社が誕生してからの句会、句集の作品などが記載されており、石狩文化の光芒が明らかにされていることに感動するのである。先にも一寸触れたが四百頁に近いこの本のうち過半数の各頁に収録されている。年々の俳句作品を読みついでゆくと、個々の作品を通して、時代相や思いがけない往時の出来ごとなどにも興味が喚起されたりして、誠に有り難くも嬉しい資料の発掘と言わねばならない。

それから、文中大正七年の項や「あとがき」の中で著者が北海中学二年であった頃、一時的ながら知遇を得た栗木踏青（俳人）のことを懐古されているが、この小さな記述にも著者前川氏の人間質が浮かび上がって来て感動を覚えるのである。

長い年月をかけて、この労作を完成させた著者の尊い努力に対し、深い敬意を覚えると共に、著者の人柄に信頼を寄せて、協力を惜しまなかった多くの研究者、資料提供の方々にも、読者の一人として感謝せずにはいられないのである。正に前川氏以外の何人も為し得なかったこの誇るべき一巻を掌にして、感銘を更に強くするのである。

新聞にも紹介されたので蛇足と思うが、この著書の出版社は札幌の北海道教育社、定価は二五〇〇円である。高倉新一郎氏が序文を書かれていることも付け加えたい。

昭和六十年度事業から

事務局

例年にない大雪に見舞われた今年の冬もそろそろ終わりを告げようとしています。前号は発刊までひじょうに時間がかかりましたが第六号は、編集委員、会員のご協力により予定より早くできあがりました。

六十年度を振り返ってみますと、会員の皆さんが郷土研究に一段と熱意を燃やされ、例会に調査研究に真剣に取り組んだ年といえるでしょう。今年度の事業の中心はなんと言っても会全体で取り組んだ『町内の石碑調査』と『石狩空襲の調査』でしょう。これにつきましては、すでに会長、青木、金子会員が本号に書かれていますので繰り返しませんが、会にとっても石狩町にとっても大変意義あるものだと思います。この二つの調査については、新年度も継続し是非一冊の本にまとめたいものです。今後もこのような調査を続け、石狩の歴史の掘り起こしをしていきたいものです。

このほかの事業としては、町内と町外の見学事業を例年どおり行いました。まず、町内の見学事業としては七月十三日に高木会員が住職をされている『了恵寺』を会場に行い、高木さんが永年にわたり収集された資料、了恵寺の歴史について勉強しました。

また、当日、石碑調査についての打ち合わせも行いました。

町外の見学については、十月二十日、当別町と月形町で行いました。当別町では昭和四十五年、開拓百年を記念して建てられた『当別町開拓記念館』と昭和五十七年に開館した当別開拓の祖、伊達邦直をしのぶ『伊達記念館』『伊達別邸』を訪ねました。

開拓記念館の展示は、開拓期の資料を中心にしたもので当時の当別の様子が一目でわかるように配置されていました。また、屋外には瓢箪石、クジラの化石など当別町の地史がたどれる展示もあり、興味深く見学できました。

『伊達記念館』『伊達別邸』は、伊達家を中心とした資料を展示し、よく整備された資料館でした。資料のなかでとくに目をひいたのは、当別の開拓にいたるまでの経過を克明に記した邦直や家老の日記類で、説明によるとまだ未解読のものもあるというので、あるいは石狩町に関係する記事もあるのではないかと思いました。

記念館の前庭には、歌人としても有名だった邦直（桃園）開拓当時を偲んで歌った。

あそ山のしげる木立をふみ分けて住み見し月の今も替わらず

桃園

詞書

（過し明治五年壬申春より、この当別村を開き移住せしを思いて）

の歌碑が建っていました。

昼食後、国道二七五号を北上、月形町に向かい『北海道行刑資料

館』を見学した。行刑資料館はかつての樺戸監獄を資料館としたユニークな資料館で、観覧者がひじょうに多いのが印象的だった。

この後、少し足をのばして月形刑務所も見学して一日の日程を終え帰途につきました。

（石橋記）

昭和六十年度石狩町郷土研究会々員名簿

			電話六二一三〇〇六
顧問	花田　知也	大字弁天町一	
〃	長谷川　嗣	大字生振村七線南	六四一六三五五
会長	山口　福司	花川北四条二丁目一五〇	七四一七六一八
副会長	福田　佐市	大字花畔村北一四線	七四一三一七〇
〃	吉本　愛子	花川北三条四丁目四一	七四一〇四七二
理事	前川　道寛	大字生振村三線北	六四一九二四八
〃	高木　憲了	花川南二条五丁目一六五	七三一〇二四四
〃	沖本　義久	大字八幡町高岡	六四一三四二二
会計	村井喜久司	大字花畔村一七八－一四八	六四一三〇八三
監査	金子　仲久	大字花畔村北十一線	六四一二五六九
〃	鈴木トミエ	花川北五条三丁目二四－二八	七四一七三八二
	吉田　重男	大字生振村三線南	六四一九二一六
	田中　實	花川北六条三丁目七	七四一三五五〇
	阿部　徹雄	花川北六条五丁目四	七四一七一三〇
	駒井　秀子	帯広市柏林台南町一－二三（〇一五五）三二一〇三七三	
	岡崎源次郎	花川南一条四丁目八八	七三一〇九六三
	吉野　惣栄	大字生振村九線北	六四一九四七三
	石橋　孝夫	大字親船町ヤウスバ二七－二七一	六二一三一四八
	大島　龍	大字親船町ヤウスバ	六二一三二一〇
	黒田　晶子	大字親船町ヤウスバ	六二一三二一〇
	畑宮清一郎	花川北五条三丁目六六	七四一〇五四八
	青木　隆	花川北五条二丁目五〇	七四一三六六〇
	川村　正三	花川北四条四丁目九九	七四一五〇七五
	高瀬　たみ	花川北一条二丁目二四二	

いしかり暦　第六号

昭和六十一年三月三十一日　発行

発行者　石狩町郷土研究会

印　刷　㈲さんふう社